

鄂上語生子全集

第十五卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十五卷

第二回配本(全二十三卷)

一九八〇年七月七日 発行

定価二八〇〇円

著者 野上彌生子

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三二六五二四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

©野上彌生子 1980

目次

みちのくの旅 三

友の家(四) 字樽部まで(二七) おまささん(四〇) まるび・すぐり・その他の食べ物(四六)

盆踊(五) 優曇華(六三)

台湾 七

東海岸 七

第一步(七) お客さま(七) バタカンまで(八五) 蕃域の人たち(九三) タロコ娘の舞

踊(一〇) 薄薄蕃社(二〇) 大頭目の姪(二六) 蟹籠籠(三三)

西海岸とところどころ 二六

南風 二五

朝鮮・台湾・海南諸港はしがき 一七

私の中国旅行 一六

まえがき 一六

中国の南門・広州	一六六
北京・胡同の家	一四四
北京の監獄	三三八
大同と雲崗	二五四
延安紀行	二七八
黄陵(二八四) 茶舗(二九三) 鹿都(二九八)	
の部屋で(三〇〇) 女たちの洞窟(三〇三)	
楊家嶺(三〇八) 王家坪(三二五) 棗園(三二九) 石の床	
延安をたずねて	三三三
新しく且つ古い中国	二四七
洞窟の町延安	三五二
後記	三五五

紀
行
一

みちのくの旅

友の家

汽車が盛岡をはなれると、私は子供たちに手伝はせて、棚の鞆を下し、座席に散らかつてゐた雜誌や、菓子罐や、空気枕や、戦争将棋の箱、扇子、手巾ハンカチと云ふやうなものは、何もかも籐の籠に押し込めた。これから訪ねて行かうとする友達のK―さんの村は、次の駅で下りて、そこから軽便に乗り換へなければならぬと教へられてゐた。時間表を見ると盛岡から約四十分である。昨夜ゆうべ上野を立つてから十五時間も窮屈な箱の中に閉ぢ込められてゐた子供たちには、その四十分が今まで乗つて来た時間よりもつと長く見えるらしかつた。降車の支度が出来ると、彼等はどうかけないで立つてゐた。下の男の子は二人の兄達の間に挟まりながら左右の手頸を替りばんこに覗いて見て、その度にもう二十分だ、もう十五分だと叫んだ。

私自身も落着いてはゐなかつた。その感情は単なる待遠しさや、新たに見る土地に対する旅人の一般の興奮とは違つたものであつた。私は窓際に腰掛け、向ふの空に八月の、もつと正確に云へば八月九日の午前九時過の光線を全面に浴びながら、左の肩かたに鈍たでぶつかいだやうな窪みを以つてがつしりと突つ立つてゐる、一つの立派な山を眺めてゐた。これは巖手山いわてさんであつた。この山の名前を何かにつけてK―さんに聞いてゐた時から、いかに長い月日が過ぎ去つたことだらう！ 半時間前はじめて山

の姿を眼にした瞬間私を打つたこの感情は、今も胸を離れなかつた。二十年前の女学校生活が、他愛のない夢とお饒舌しゃべりと盛んな食欲の外何んにもなかつた透明な、明るい過去の断面が、スクリーンの上の映画のやうに意識に照らし出された。この時代のお転婆仲間て今日まで友達として残つてゐるのはこのK—さんだけだと云つてもよかつた。それでなくとも女学校の友達は卒業とともに友情も終りを告げるのが普通であつたのに、私達の学校は(古い有名な学校で、また風変りな面白い学校であつたのが)私達が卒業して四五年もすると潰れてしまつて、学校の名前で表面上の連絡だけでも取ると云ふ方便さへなかつたので、同級生は文字通り散り／＼になつた。何かで懐しく思ひ出すことがあつても、私は皆んなが何処にどう住んでゐるか想像することさへ出来ない程である。斯んな中で二人だけは不思議に交りを絶たなかつた。それだけ仲がよかつたのだと云へば簡単であるが、仲のよいだけならK—さんに劣らない位仲よくしてゐた友達が外にゐなかつたのではなかつた。且つ生れた土地が北と南と五百里も離れてゐたと同じやうに、私達は気性も傾向も、結婚後の境遇もすつかり違つてゐたし、何年も逢はなかつたこともあつたが、それでも常に友達であることに交りはなかつた。しかし打ち明けて云へば、私がK—さんの本統の値打を見出し、それまでの呑気な親しみとは別な信頼と根強い尊敬を感じるやうになつたのは、K—さんの身の上に思ひがけない不幸が生じた後であつた。K—さんは高等科を出ると従兄いとこの騎兵将校と結婚した。九年目に夫の中佐が発狂した。二人の間には子供がなかつた。恩給と勲章に附いてゐる金の外には収入がなかつた。この酷い運命を、K—さんは想像

し得る限りの素直さで受け取つたばかりでなく、一層驚くべきことには、狂つた夫に對して無事な頃よりも純粹な愛情を捧げることが出来た。斯うしてK—さんは狂人と十年間暮した後、大地震の冬未亡人になつた。私はやつと重い鎖から放たれたK—さんのためにちよつとした勤め口を見つけてあげて、その時云つた。あなたは今日まであんまり生贄いけだての血を流し過ぎたから、これからの生涯は自分の好きなやうにして楽しむとよい。——K—さんも今一度新しく始める生活に就いて希望をかけてゐた。病室に心を残さないで門の外に出られるだけでも天国だと云つた。しかしK—さんの天国は現はれた後から消えた。勤め先に通ひはじめて丁度七日目に、郷里の実家から嫂あねの死を報ずる電報が届いた。お兄さんもほんの二三年前に亡くなられたばかりであり、後に残されたのは二人の幼い孤兒みなしごと、古い大きな、すでに衰運に向つてゐる大地主の家であつた。この子供たちの養育と家の管理のためにどうしても国に引つ込まねばならなくなつた時、K—さんは自ら憫むやうに述懐した。狂つた人の看護婦がやつと免職になつたと思つたら、今度はまた保母さんだから、私もつきつきにいゝ役廻りね。

汽車が迂廻したと見えて、巖手山の窪みはいつの間にか正面に移り、紫色の輝く皴しづになつて現はれた。一塊の大きな白雲が、その横にぼつかりと浮かんでゐる。頂上に行くほど樹木を失つて、ところどころ赤褐色の粗あい肌を露骨にしてゐる山の巖いふしい姿は、この皴と雲によつて盛岡の方から仰いだよりも一層印象的なおもしろい観物になつた。しかし私の興味は今山から裾野に転じてゐた。きれいに刈込んだ芝生のやうな稲、粟、黍、葉のあらびた桑、白い花に茜色の茎を透かした蕎麦、あづき、

馬鈴薯——火山灰質の黒い土を蔽うて豊饒につづいてゐるこれ等の穀類や野菜の間に交つて、林檎畑らしい、すでに紙袋をつけた棚作りの果樹園が立つてゐるのを見つける度に、私は、今日こそやつと約束の林檎畑を見ると思つた。巖手山とその裾野の林檎畑は、K—さんに絡まる古い思ひ出から切り離すことの出来ないものであつた。それにしても、秋になる度に、毎年寄宿舎に送られて来た箱詰の新鮮な林檎を、私達はどんなに貪り食べたらう。当座は唱歌も英語も林檎臭かつた。九州に生れた私が林檎の本統の味を知つたのはこの時だと云つてもよかつた。またこれ等の林檎が、北国の秋の果樹園に真つ赤に輝いてゐる光景を想像することは、一つの異国的な詩であつた。K—さんはその林檎畑を見るために、一度どうしても巖手山の麓の家に来なければならぬと云ひ張つた。私はきつと行くと約束をした。その代りK—さんも九州の私の家を訪ねる筈であつた。黒潮の流れる海の蜜柑畑を見るために。——私が林檎畑を見たことがなかつたと同じやうに、K—さんは蜜柑畑を知らなかつた。修学旅行で鎌倉に行つた時、長谷の観音の横ではじめて蜜柑の樹を見て、大騒ぎして悦んだK—さんの若い姿をはつきり思ひ出すことが出来る。何もかも古い昔になつてしまつた。さうして、何もかも變つてしまつた。富と名望の備はつたK—家の長女として、あの頃には誰よりも幸福であり、いつまでも幸福であるらしく見えたK—さんが、人一倍苦しい人生を通つて、今はあはれな世捨人である。また偶然の機会からK—さんの田舎を訪ねて、昔の遠い約束を果たさうとしてゐる私は、三人の男子をもつた、昔の面影もない母親である。

「お母様、もう直ちきよ。あと五分。」

相変らず時計の見張をやめなかつた三男は、この時反対の窓際から私の方へ振り向いて呼びかけた。私がいつまでもぼんやりしてゐたので、この予告を特に私に対して必要だと感じたらしかつた。私は立ち上つて子供達と一緒に立つた。彼等は同乗者から探り出した知識で、その窓の側がプラットホームだと云ふことを知つてゐた。で私達はその方のドアの傍そばに集まり、めいめいの荷物を手に持ち、止まりさへすれば降りられるやうに身構へながら、それでも最後の二三分は、Kーさんがこの乗換駅まで出てゐて呉れるかどうかを問題にする余裕があつた。私と三男はそれを信じ、兄達は多分つぎの停車場だと云ひ張つた。半分は面白さから、私達はどちらも意見をたげなかつた。汽車はその争ひの中をまつしぐらに××駅に駆け込んだ。がたん！ 恐ろしいはづみをくつて停車した。私たちは四人でぶつ突かり合つた。その瞬間に勝利はきまつた。

「Kーさんのをば様。」

勝ち誇つた三男は、プラットホームを私達の箱を目がけて走り寄つたKーさんと、その養子分になつてゐる、見知り越しの学生の方へ子供らしい悦びの声を張りあげた。

もし私たちが日本人でなかつたら、きつと飛びついて、抱いたり、接吻したりしなければすまなかつたであらうやうな感情がそこにあつた。しかしKーさんと私は静かに微笑し合ひ、丁寧に頭を下げ合ひ、それからつぎの数語を交換しただけであつた。

「やつと来て下すつた。」

「ほんとうに、やつと。」

「何んだか嘘のやうだ。」

「私だつて、今になつてあなたの田舎の家が見られようなんて、思ひもかけなかつた。」

全く偶然であつた。ことの起りは夫が東北地方で二三の講演を引き受けたのに始まつた。この旅行は私たちにこの夏を十和田で過すことを思ひ立たせ、その思ひ立ちがまた丁度途中にあるK—さんの故郷を訪ねようと云ふ思ひ立ちを誘ひ出したのであつた。夫は先に出発した。私達はK—家に二晩泊つた後、青森県の古間木ふるまき駅あたりで落ち合ふことになつてゐた。

「折角入らして貰つても、山の外には何んにも見せられるものはないのよ。——林檎畑なんかもう残つちやゐないし、家は荒れ放題に荒れてゐて、私自身でさへ時々呆れるくらゐなんだから、あなたが見たらびつくらするでせう。」

乗り換へた軽便の最初の駅に当るK—さんの村に降りると、K—さんはそんなことを云ひながら私たちを導いた。駅から邸まで十分とはかからないのださうであつた。私たちは駅前こみせの並んだ、正面に巖手山がいよいよ間近く迫つて聳そびえてゐる道をまつ直ぐに進んだ。店が切れると左右は広広した稲田と畑であつた。やがてT字形になつた道を右に曲つて、行く手に鶯色とびいろの百姓家や、森や、木立にかこまれて伸びてゐる部落を目にした時、取つつきに立つた高い屋根や白い壁の一廓くわくが直ぐ私の注

意を引いた。直覺してあれがKーさんの家だと思つた。矢張りさうであつた。表門は廻りになるからと云つて、Kーさんは小さい養魚場のそばを抜けて裏から私たちをその大きな家の中へ連れ込んだ。全くばかばかしく大きくて、廣くて、さうして古い家であつた。中でも一番新しく——それでさへ六十年前に建て増したのだと云ふ、泉水造りの庭をひかへた二間つづきの閑雅な離室に落ち着くまで、私たちはがらんとした幾つもの大きな蔵や、身の丈ほどの雑草に蔽はれた空地や、お寺の庫裡のやうな板張りの部屋や、雨戸を締め切つたままの陰気な長い廊下や、恐ろしく大きな炉を塞いである、踏むと畳のぼこぼこする部屋や、それと似たやうな湿つぽい、古風ながつしりした飾りつけのしてある部屋、さう云ふものを抜けたり、覗いて見たり、通つたりしたが、どの順序でどう歩いて来たかちよつとは分らなかつた。

「こんなにだだ廣くても、座敷らしい座敷はほんのこだけで、あとはもう半分腐りかけてゐるのよ。雨でも降らうものなら、方々漏り出してそれこそ騒ぎだわ。」

「どのくらゐ古いの。」

「それが分らないの。村の年寄り達も知らないつてほどだから。」

しかしこの家を一種特異に印象づけてゐるのは、単に広さや古さではなく、あまりに人氣なく空虚なことであつた。裏門を入つて以来、私たちは或る蔵の前で庭の上に穀物を拵げてゐたムジツクのやうな二人の下男に出逢つたきり、誰にも出逢はなかつた。部屋に落ちついても、洗面の水を持つて来

たり、茶菓を運んだりするのは、停車場にKーさんと出迎へて呉れた学生自身で、違つた顔は現はれなかつた。むしろ現はれて来る者が存在しないかの如く、家ぢうがことりともせず静まり返つてゐた。しかし他の者は兎に角としても、Kーさんの世話をしてゐる二人の小さい人たちだけはゐない筈はなかつた。私は彼等に対して愛情の交つた期待をもつてゐた。多分二人は、私たちが子供の時分珍しい客に対して示したと同じ無邪気な好奇心から、一番に飛び出して来るであらう、さうしてこの短い滞在の間、彼等と私の子供たちはよい遊び仲間になるであらう、と考へてゐたのであるから、彼等の姿を見かけないのは何より当外あそばづれであつた。私はKーさんに二人はどうしてゐるのか、何故ここへは連れて来ないのか聞いて見た。するとKーさんは二人ともひどい羞はかみ屋で、知らない人には決して逢ふことが出来ないのだと云つた。

「東北の者は一体にさうだとおもふけれども、ことにKーの家の血筋の者は子供の時分から人馴れない、偏屈なところがあつて困るの。」

「幾つと幾つでしたか知ら。」

「十二に六つ。」

その幼い二人の主人が、伯母を客に取られ、母屋のどこかの隅にぼつんとしてゐるであらう光景は、ちよつと胸の痛い想像であつた。私は馴れた女中でもゐるのか聞いて見ないでゐられなかつた。

「女中たちもゐるし、それに今は妹が子供づれで来て呉れてゐるから、うつちやつておいていいの

ですよ。」

しかしその説明は私を安心させるとともに喫驚ひつぷりさせた。それならば可なりな人数じんずがそこには集まつてゐる筈であつた。それでゐて何故かう音もなくひつそりとしてゐるのだらう。それだけの人のうち誰かの話声か、どの子供かの元気な叫び声が、何故聞こえて来ないのだらう。そんなものが伝はるには余りに遠過ぎるほど向とこちらとは離れてゐるのだらうか。むしろ、それは距離や広さや人数の問題ではなく、もつと根本的な、この古い建物自身に沁みついてゐる、人力のどうすることも出来ない寂寥のやうな気がした。私が東京からK—さんの淋しい生活について考へたことなどは、まだ生温なまぬるいものであつたのを、この時はつきり感じた。同時に私は、話だけにはよく聞いてゐたK—さんの妹さんに逢つて見度かつたのであるが、云ひ出す勇気がなかつた。かう云ふ空気の中に慎ましく暮らし馴れた人を、それはただ迷惑がらせるに過ぎないであらう。

そのうちに廊下の方に珍しく多くの足音がつづいて、三人の女中が入つて来た。時間すぎの昼御飯を運んで来たのである。正直に云ふと私はこんな取り扱ひを予想してはゐなかつた。食事も昔風な大きな炉端で、K—さんや、その預り児や、もし出来たら下男や女中たちといつしよに辛い味噌汁でもすすつて、呑気な田舎話を聞きながら食べるのを楽しみにしてゐたのであるから、秘蔵らしい蒔絵の椀わんに九谷の皿小鉢をそろへた立派な膳部ぜんぶが、十畳かみの上の間にずらりと並べられたのを見ると、済まないと思ふよりは、軽い失望をまづ感じた。私はさつきから池の鯉で騒いでゐる子供たちを庭から呼び